

ケムトレイルを飛行機雲として紹介する読売新聞

平和統一 NEWS No. 92 (2016/5月号)

渡辺 久義

私は今まで新聞名を言わず、「ある大新聞」として批判してきた。今、最近の目立たぬ悪質な文章をきっかけに、はっきりこれを読売新聞と名指すことにする。私はこの新聞の長年の読者だからその権利はあるだろう。ただ、これは読売だけの話でなく、他の有力紙でも事情は基本的に同じだと考えている。

4月10日の日曜版に、司馬遼太郎の「播磨灘物語」を紹介すると称して、播磨平野を望む大きな夕焼け空の写真が載っていた。この空には幾筋もの、明らかにケムトレイルとわかるものが交錯している。そしてこれは、偶然写り込んだものでなく、明らかにケムトレイルを写したものであることもわかる。しかし、そのキャプションには「書写山から見た夕空には幾筋もの飛行機雲。三木城攻めの本陣をこの山に置くよう官兵衛は秀吉に進言した」と、いかにも当たり前のことを言うように書かれている。

「そうか、どうもおかしいと思っていたが、最近の飛行機は昔と違ってこんな飛行機雲ができるのか」と、これを読んだ人々が思ったかもしれない。そんなことはない。飛行機雲は昔と変わらず、もっと細く、せいぜい飛行機の全長の数倍か10倍くらいの長さで、すぐに消えてしまう。こんなふうに残留することはない。だんだん太くなり変形して、いつまでも（時には半日くらい）残留するのはケムトレイルである。ケムトレイルのそばを、飛行機雲を引きながら飛行機が飛ぶ光景はいくらでも観察できる。

この写真説明は、人々に意図的に間違いを教えている。特に子どもたちに対する影響は大きい。これは明らかに**犯罪である**。好意的に解釈して、万一、記者自身が知らなかったのだとしたら、そんな非常識な記者はやめるべきである。これは、桃の花を間違っ**て桜と紹介する**というような話ではない。

このケムトレイル問題は、顔の見えぬ敵との血みどろの戦いともいうべきもので、10年以上の深刻な世界的歴史をもつ。「ケムトレイル」と検索すればすぐに出てくるが、ある女性が「いったいこれは何ですか？ こんなことがあっていいのですか？」と、関係のありそうな日本のあらゆる省庁に問い合わせたが、どの省庁も答えられなかった。これはアメリカでも同じで、どこに問い合わせても、これだけの大規模な悪事の責任者がわからない（ように

なっている)。そして、主流メディアが隠ぺい（ごまかし）に協力するという点でも、日本、アメリカ、EU 諸国、すべて同じである。

警世家アンドレ・ヴルチェクがこう言っている——「日本には気骨というものがない。日本には外交政策がない。彼らは全面的にアメリカから命令を受けている。ある NHK の職員から私はこういう話をよく聞いている——日本のいかなる大手のメディアも、国際問題に関して、どんな重要なことも報道する勇気をもたない。彼らが報道するのは、アメリカの大きなネットワークの少なくとも一つが、すでに発表したものだけである」

もう一つ、ネット世界でよく引用される、ドイツの新聞フランクフルター・アルゲマイネの記者だったウルフコッテ (Udo Ulfkotte) の告白ビデオがある。(2016/2/5「ドイツの主導的ジャーナリストが告白——自分や他の西側記者は CIA に買収されていた」) 彼は、自分が今まで書いていた署名入り記事は、CIA から渡された英語の原稿をドイツ語に訳しただけだった、もうこれ以上、腐敗した生き方をする気はなくなった、自分を処断する、と言ってこの告白をした。

この通りとは言わないが、基本的に、こういうことが日本でも起こっていると考えられる。ごく最近の GeoengineeringWatch.com に、「気象操作を否定し騙す、主流メディアの責任を問う」(2/24) とか、「気象操作隠ぺい、犯罪的企業メディアを暴くことが肝要」(4/20) という記事があるところを見ると、最近特に、世界的に上からの指令があったのではないかと考えられる。ジャーナリストや、買収される科学者の良心に待つよりほかはない。

気象操作や毒物空中散布がどれだけ重大な犯罪であるかについて、我々は www.dcsociety.org に、何回となく警告記事を掲載してきたが、この私のエッセイに続いて、故 Dr. Ilya Sandra Perlingieri による、総決算的な長い論文「ケムトレイル：有毒金属と化学エアロゾルの人間の健康への影響」を翻訳掲載するので、特に読売の編集者は必ず読んでいただきたい。

私が読売に対して言いたいことの別の一つとして、2009 年、ダーウィンの「種の起源」出版 150 年記念として、あなた方は 2 面に及ぶ特集記事を組んだ。しかし私が日本に紹介し、世界的に盛んになりつつあった「インテリジェント・デザイン」については、一言も触れなかった。これは科学と学問一般の足を引っ張るものである。ごく最近のアメリカの世論調査でも、ダーウィン信奉者は格段に減った。のみならず、かつてよくあった、大学の研究者がダーウィン説の証明になりそうな、何かを発見すると、新聞と NHK テレビが飛びついて報道するという光景もなくなった。これは、こんな不毛な前提による研究をする者がなくなったということである。